国土交通大臣賞

石田 正年

［静岡県］

設計・施工に当たって配慮した事項

基本的考え方

特に“再生”しなくても、もともと“7つの理念”を十分に兼ね備えていた住まいである。ただ、しばらくの間、我々の価値観が少し違う方向性をみてしまっていたように感じる。設計に当たっては、新しいことを提案するというより、もともと兼ね備えていたもので、時代や社会の変化などにより機能しにくくなっていた部分を調整し、繕いながら、これからも3世帯が住み継いでいける住まいとなるように心掛けた。

7つの理念に対する設計方針

地球環境への配慮	身近な自然や素材に素直に向き合う昔の町屋での暮らしは、無駄のない豊かさや厳しさを伴う力強さがあった。3世帯が一緒に暮らすこと、暑さ寒さとの付き合い方、素材の転用、洗いによる再利用など、できるだけ受け継ぐようにした。
気候・風土の活かし方	今は、車の道になってしまった旧東海道に面している。以前のように山と海からの風を呼び入れ、安心して出入りができるよう、町屋がもつ建物のルールを壊さぬよう注意しながら南に曳き家した。気候や風土を熟知して建てられた町屋の本来の姿（機能や特徴）を取り戻すようにした。
日本の伝統・文化の継承と人格形成の支援	土間や中庭、みせの間、中の間、座敷…、これらは現代の住宅ではほとんどみられなくなった。効率的なもの、新しいものが価値観の対象になりやすいからだろうか。だが実は、無駄なもの、あいまいなもの、ルーズなものは、家族が暮らし、成長していくうえで、おおらかさや優しさを生み出す大切なものではないだろうか。
高齢者や障害者の自立支援	手摺りやスロープがなくても、曾おじいちゃん達は亡くなる直前まで壁を手摺り代わりにしながら、外のトイレに行っていたそうである。家族は、毎日その姿を見ることにより、健康状態が分かったという。3世帯がそれぞれの距離を柔軟に保ちながら一緒に暮らすことは、居るだけで安心感があり、無理せず自立ができるのではないだろうか。
生命の安全への配慮	細長い敷地に建つ町屋は、道路と平行方向の壁が少なく地震に弱いといわれている。しかし、貫や足固め、差し鴨居など今の耐震基準では評価されない構造材もある。 これらを活かしながら、RC基礎や透湿性をもった構造用合板で現行の基準に準じた補強を行った。
財産を守る	80年を経たこの住まいは、他人から見た目はオンボロであったが、家族ひとり一人がもつ愛着がたくさん詰まっていた。世代が代わる（当主が代わる）ごとに3世帯が住む場所をそれぞれ移しながら住み継いでいく。住み継ぐことが、財産を受け継ぎ守っていくことのように思う。
病気をつくらない	「ほこりは、漢方薬」だそうである。おおらかである。そんな気がしている。昔から使われていた漆喰や杉の床板、畳など、病気とは無縁なことは、触ってみれば分かる。 温室ではない、自然の中で育つ、無農薬野菜のようである。

応募者

応募責任者／石田正年
（（株）自由工房 静岡事務所　静岡県静岡市）

応募した家の概要

構造／木造
階数／2階
延べ面積／297.2㎡
概算工事費（推定を含む）／19.7万円/㎡
建設状況／建設済み
データマップ日本の気候 該当ゾーン／55

建設（予定）地の概要

建物の所在地／ 静岡県庵原郡蒲原町

気象・自然環境の特性／ 富士山の南西に位置し、海と山に挟まれた東西に細長い形状をしている。そのため、穏やかな気候に恵まれ、豊富な日照量と海や山から吹く風は、住まいに快適な環境を提供している。

社会環境の特性／ 建設地は旧東海道に面しているが、交通量が増大し、古い町屋が少しずつ新しい住宅に建て替えられ、町並みも変わり、かつての土間や中庭を自由に行き来していた近隣との付き合い方も変化してきている。

文化・風土の特徴／ 蒲原は旧宿場町であり、旧東海道に沿って東西に町が形成されてきた。現在でもその面影を多く残し、住民の町つくり活動も行われている。伝統的建築保存地区のような保護・評価はないが、新旧混在の町を評価するなど自由でおおらかな風土をもつ。

審査委員講評

蒲原の旧街道筋の民家の再生。80年を経た住宅に潜む「良さ」を再発見し、それぞれを少しだけ増幅するように現代の知識や技術や材料を入れ、丁寧につくられている。風や光を導き、自然の快適さを引き出す設計の原理は昔と同じだが、それを増幅するために工夫された細部の蓄積は例えば、実に多様な開口部のデザインに見られる。どのように開け、どのように閉めるか、季節に応じた多様な組み合わせが想像できる。ストックされているのは部材だけではなく住み方の文化もまた。（小玉）

大正時代から80年以上住み継がれてきた民家の改修であり、旧東海道蒲原宿の伝統的な町並みと調和が図られている。また土間、中庭、中の間といった伝統的空間を上手く利用して、記憶の連続性を維持しつつ、現代的な家族の交流の場を形成している。さらに、生活の変化に対応できるフレキシビリティーをもたせ、3世代の家族生活の器として今後も長く住み継いでいくための工夫がなされている点を評価した。（芦原）

町屋はもともと7つの理念を満たすようにできている。その良さを活かした結果は、できるだけ何も引かない何も足さない、という基本理念に凝縮されたと感じさせる。これは、最初から意図されたことではなく、長年にわたって培われた住まい方の知恵や家人の思い入れを丹念に汲み取り、活きた再生の結果として導かれたものであろう。伝統の形と暮らしを活かしながら、よくまとまっている。（坊垣）

民家再生に、大地に還る住宅の7つの理念を備えるコンセプトであるが、先人達のつくってきた民家は、本来これらの理念を有している。再生にあたっては、これまでの改造によって隠されてしまったそれらの構造を引き出す作業とも言える。家の歴史を読む仕事である。再生された建物の間取りは、現代化されたが、増築部にも再生民家の木組みの思想を吹き込むと、さらに次世代に住み継げる架構となるであろう。（松井）

この作品は、歴史的なコンテクストのなかで、今日の住まい手のニーズにあった空間を作り上げることを丁寧に追求したもので、丹念なプレサーベイや、平面構成の巧みさといった設計者の技量の高さや、曳き屋という大技をさりげなく使っていることに好感のもてる作品である。住宅は単体では成立しない。都市・集落のコンテクストと整合し、まちなみ・いえなみや、その空間構成の豊かさを高めていくことが、住宅そのものと、都市・集落それぞれのアメニティーを高め、住み継ぐ価値を高めていく。この作品はまさにその範を示している。（野城）

大地に還る住宅提案競技　住み継ぐ家　～もともと“7つの理念”を兼ね備えていました～

大正時代から80年以上、住み継いできた住まいです。

はじめは、すべて新しく建て替えることを考えていました。でも、話し合いを進めていくうちに、土間や引き戸、中庭、3世帯をほどよく保つ距離感、さらには寒さや暗さといったマイナスに考えることも、みんなが評価していることが分かってきました。「それじゃぁ、建て替える必要ないんじゃないの？」「でも、80年も建っているから、あっちこっち傷んでいるし…」「修復したら？」「文化財のように特別な材料を使っているわけじゃないからなぁ………」そんなやりとりから始まりました。

古いものをポジティブに評価することから始まっています。

例えば、暖房設備は、なかのまに掘りコタツがあるだけで、冬は寒い。けれど逆に、家族は必ずなかのまに集まり、3世帯みんなで暖をとる。土間は、薄暗く長く無駄なスペースのように捉えられがちですが、小さい子供の安心した遊び場になったり、訪れた人の親密度により段階的な客間であり、作業の場、炊事の場、通り抜けの場など、家族が顔を合わせる場所として機能していました。また、段差も多く手摺りも付いていないけど、上がり框が手摺りがわりに使われたり、慣れた段差や無駄なスペースはかえって日頃の運動をさせる場であるなど、普通では“不便”となることも、魅力として捉えているようでした。玄関や台所を別々に持たなくとも、中庭を挟んだ3世帯のほど良い距離感は、3世帯が一緒にすむ“住まい”を成立させていました。亡くなった曾おばあちゃん曰く「ほこりは漢方薬」だそうです。おおらかです。一般的には「ちょっとやせ我慢」なんて言われてしまいそうですが、こういうやせ我慢は大切にしたいと思いました。

「あれ？前と一緒だね」

打合せでは様々な検討を行いましたが、結局それまでの住まい方にもどってしまい、「あれ？前と一緒だね」はよく聞かれた言葉です。その言葉がでるとみんなホッとした安堵感を覚えました。

具体的には…

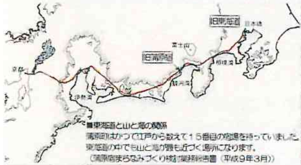
昔の町屋が持っていた隣との建物配置のルールや蒲原（かんばら）の特長である町並みに配慮しながら、県道（旧東海道）を通る車からの影響を避けるため、母屋を少し南に曳きました。そして住み慣れた各部屋の構成や3世帯をほど良い距離で保ってきた中庭の大きさを基本に、生活の流れや空間のボリュームを調整し、風や光の取り入れ方を工夫し、かつ耐震性を確保しました。

さらに、落ち着いた重心の低さや暗さ、「オモテやオク」といった空間の奥行き、夏冬障子の衣替えによる季節とのつき合い方、引き戸が持つ間取りの自由度といった魅力は損なわないよう心がけました。仕上げも、確かな質感をもち、美しく朽ちていく、それまでと同じ自然素材を使用しました。

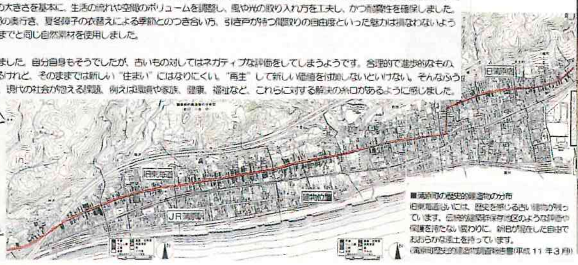
最後に

改修の間も、蒲原の昔ながらの町屋が新しい住宅に建て替わっていきました。自分自身もそうでしたが、古いもの対してはネガティブな評価をしてしまうようです。合理的で進歩的なもの、新しいものが良い評価の基準で、古い住宅は観光や文化財の対象にはなるけれど、そのままでは新しい“住まい”にはなりにくい。“再生”して新しい価値を付加しないといけない。そんなふうに捉えているのではないでしょうか。けして先祖帰りではありませんが、現代の社会が抱える課題、例えば環境や家族、健康、福祉など、これらに対する解決の糸口があるように感じました。

県道（旧東海道）沿いの町並み



■東海道と山と海の関係
蒲原町はかつて江戸から数えて15番目の宿場を持っていました。東海道の中でも山と海が最も近づく場所になります。
（蒲原宿まちなみづくり検討業務報告書（平成9年3月））



■蒲原町の歴史的建造物の分布
旧東海道沿いには、歴史を感じる古い建物が残っています。伝統的建造物保存地区のような評価や保護を持たない変わりに、新旧が混在した自由でおおらかな風土を持っています。
（蒲原町歴史的建造物調査報告書(平成11年3月)）

土間からみせのま（中庭）、なかのま、おかってを見る

みせのま（中庭）ごしに父母スペースを見る

居間からおかってを見る

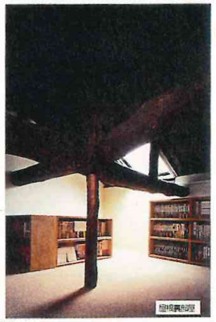
土間から居間を見る。中央の掘りコタツ。

以前と同じ位置で、土間のおかって。

父母寝室から居間側を見る。左の梯子を登り屋根裏部屋へ。

お隣とのコミュニケーションはそのままに。

みせのま（中庭）ごしに
なかのま、おかってを見る。



屋根裏部屋

居間から中庭越しに離れを見る。障子は夏障子。

土間に面した祖父母世帯のスペース。

旧東海道沿いの町並み：かつてはゆっくり歩ける道で、日差しや風をゆったり取り込むことができました。

土間からおかって側をみる：にわと呼ばれ家族誰もが通り、遊び、作業をした場所です。

みせのまからなかのまを見る：掘りごたつがあり、家族みんなが集まる居間として機能していました。

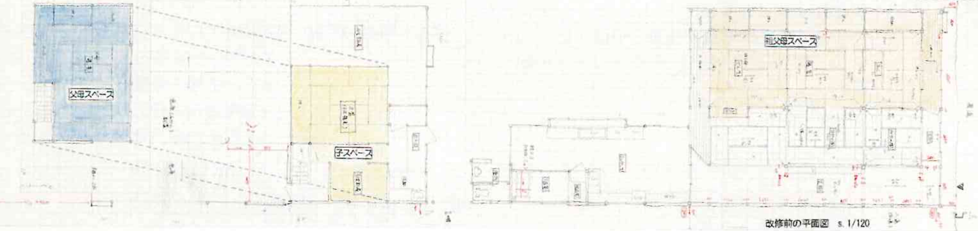
座敷から奥をみる：当主（祖父母）のスペースとしてつかわれていました。右側がなかのまです。

中庭から母屋を見る：3世帯をほどよい距離で保ち、土間で結ばれていました。

屋根裏の状況：屋根は杉板のうえ土葺き瓦、松梁等の材料は、ほとんど傷んでいませんでした。

おかってから土間側を見る：家の中心にあった土間のおかっては、3世帯が気軽に集まれる場所でした。

中庭から離れを見る：中庭を挟んだ離れは父母、子世帯のスペース。中庭や母屋へ日照、風を配慮した建方です。



改修前の平面図　s. 1/120

伝統工法に現代の技術を加えた耐震補強

現行の耐震規定に則った補強を行いました。土葺き瓦を引っ掛け桟瓦に変え、貫や足固め、差し鴨居といった伝統工法の上に、RCのベタ基礎や耐震壁の増設等の現代の技術を加えました。

昔の外壁下見板は、今話題の外壁通気そのもの

土壁は天然の断熱材、下見板張りは外壁通気工法です。防火性能、耐震性を高めるため、透湿性を持つケイカル板を加え貼り直しました。増築部分のモルタル壁の下も通気層を設けました。

寒いから、暖かい場所に家族が集まる

ちょっとやせ我慢かもしれません。改修しても、暖房はみんなが集まる居間に掘りごたつと、おかってに薪ストーブだけ。冷房はありません。でもこんなやせ我慢は大切にしたい。

夏障子、冬障子の衣替え

昔から夏冬で障子を入れ替えています。夏は簾戸で涼しさを確保し、冬は紙障子と木製の硝子戸でペアガラス並の断熱効果を期待できます。でも、それ以上に季節感が家中に醸しだされます。

先人の知恵、引き戸の魅力

引き戸によって、使い方により間取りを変化させたり、自然を状況に応じて家の中に取り込んだりすることを昔からしていました。ドアではできない柔軟な対応です。

昔の町屋が持つ、隣との建物配置のルールは守る

昔から町屋は、隣同士、日当たりや風の通り道を確保する建物配置のルールがありました。曳き家や増改築は、そのルールを壊さない範囲で行いました。

車の道になった旧東海道の影響を避けて曳き家

今、旧東海道は車の道です。玄関を出ると歩道を走る自転車にぶつかったこともありました。昔のように、気軽に窓を開け、安心して出入りができるよう南へ曳き家をしました。

住み続けられる住まい

大正時代から住み続けられてきました。今回、当主が祖父から父親に移り、母屋も祖父世帯から父親世帯に受け渡されました。「古くさい」では片付けられない大切なものがあるようです。

昔よく行われた転用の技術は地球環境に配慮した技法

昔の家では、どこかで使った柱が梁に使われるなど、材料が転用されることがしばしばありました。不用になったものを捨てないで、新しく使って行く技法です。庭の敷石は、近所の蔵の外壁だったものを転用しました。

3世帯をほど良い距離で結ぶ中庭

中庭は、以前と同じ大きさです。ひとりひとりが、自由に家族の距離を選択していました。みんなでワイワイしたい、おじいちゃんは先に寝る、ひとりで静かに本を読みたい、けんかの後はちょっと距離をおきたい……

土間は、心のバリアも低くするようです

以前から土間は奥の離れまで続き、3世帯を結んでいました。段差がないバリアフリーですが、家族間やご近所付き合いにおける心のバリアにも対応してくれるようです。鍵も付けたのですが、あまり使っていません。

■気候・風土を活かした住まい

今は、車の道になってしまった旧東海道に面しています。以前のように山と海からの風を呼び入れ、安心して出入りができるよう、町屋がもつ建物のルールを壊さぬよう注意しながら、曳き家しました。

気候や風土を熟知して建てられた町屋の本来の姿（機能や特徴）を取り戻すようにしました。

■日本の伝統・文化を受け継ぎ、人格形成の場となる住まい

土間や中庭、なかの間、座敷……、現代の住宅ではみられなくなりました。効率的なもの、新しいものが良い価値の対象になりやすいからでしょうか。でも実は、無駄なもの、あいまいなものが家族が暮らし、成長して行くうえで、おおらかさや優しさを生み出すたいせつなもののように感じます。

■地球環境を大切にした住まい

身近な自然や素材に素直に向き合う昔の町屋での暮らしは、無駄のない豊かさや厳しさをともなう力強さがありました。

3世帯が一緒に暮らすこと、暑さ寒さとのつき合い方、素材の転用、洗いによる再利用など、できるだけ受け継ぐようにしました。

■病気をつくらない住まい

「ほこりは、漢方薬」だそうです。おおらかです。そんな気がしてしまいます。昔から使われていた漆喰や杉の床板、畳など、病気とは無縁なことは、触ってみればわかります。

温室ではない、自然の中で育つ、無農薬野菜のようです。

■生命を守る住まい

細長い敷地に建つ町屋は、道路と平行方向の壁が少なく地震に弱いと言われています。でも、貫や足堅め、差し鴨居など今の耐震基準では評価されない構造材もあります。

これらを活かしながら、RC基礎や透湿性を持った構造用合板などで現行の基準に準じた補強を行いました。

■高齢者や障害者が自立して暮らせる住まい

手摺りやスロープがなくても、曾おじいちゃん達は亡くなる直前まで、外のトイレに行っていました。家族は、毎日その姿を見ることにより健康状態が分かったと言います。

3世帯が距離を柔軟に保ちながら一緒に暮らす。居るだけで安心感があり、無理せず自立ができるのではないでしょうか。

■財産を守る住まい

80年を経たこの住まいは、他人の見た目からはオンボロでしたが、家族のひとり一人の愛着がたくさん詰まっていました。

世代が変わる（当主が変わる）ごとに3世帯が住む場所をそれぞれ移しながら住み継いで行きます。住み継ぐことが、財産を受け継ぎ守って行くことのように思います。

新しいけど古い町並み

旧東海道に面する町屋です。曳き家しても、なんとか町並みとして成立させたい。蒲原の町の一つの原風景を残したい。

屋根並み、下屋のつながり、プロポーション、道とのスケール感などに細心の注意をはらいました。

花壇や縁石は、昔の姿を物語る遺構です。

花壇や縁石は、昔の土間や出入口の基礎で、そのままの位置にあります。かつての姿を想像できる遺構で、「昔ね、ここは東海道で、町屋がずーっと並んでいたんだよ」なんて語り継がれていくとよいのですが……

誰かが付けた傷やシミも大切な家族の記憶です。

傷やシミは、多少汚れていても、家族の思いがたくさん詰まった記憶です。解体も丁寧に行い、お湯で洗い、できるだけそのままにしました。それはこの家から独立した家族の記憶でもあります。

材料は、昔ながらの自然素材。でも、今、注目の素材

漆喰、杉のムクのフローリング、畳、塗装のクメソーなど、シックハウスとは無縁の自然素材です。素足や素手で直接さわると、その違いがわかります。また、自然素材仕上げは、職人さんの腕の見せどころです。

60万円／坪が目標でした。

古い建物の再生は、一般的には建設コストが高いようです。普通の住宅と同じ単価で実現できないと、蒲原らしさがどんどん失われてしまう。職人さん達のたくさんの協力がなければ実現しませんでした。

3世帯住宅でも、お風呂やおかっては1カ所

3世帯住宅というと玄関や台所が世帯ごとにつくられるようですが、各世帯の距離感がうまく確保されれば、その必要はないようです。また、位置は家族が使い慣れた以前と同じところです。

やっぱり、おかっては前と同じ土間がいい

新しくしても、炊事のしやすさや3世帯みんなが気軽に集まれるように、土間にしました。住まいの中心にある中庭と一体となるよう開放感を持ち、寒さには薪ストーブで対応します。

土間の魅力

家族の誰もが、土間の魅力を知っていました。以前から作業の場、小さな子どもの安全な遊び場、家族が必ず顔を合わせる場、来訪者の親密度よっていろいろな対応ができる場……。

みせのまを小さな中庭に

町屋には、土間に面して開放的な「みせのま」、親しい人の客間「なかい」というようにオモテとオクがあります。玄関脇の中庭は、光だけではなく、風や雨をそのまま呼び込む新しい「みせのま」です。

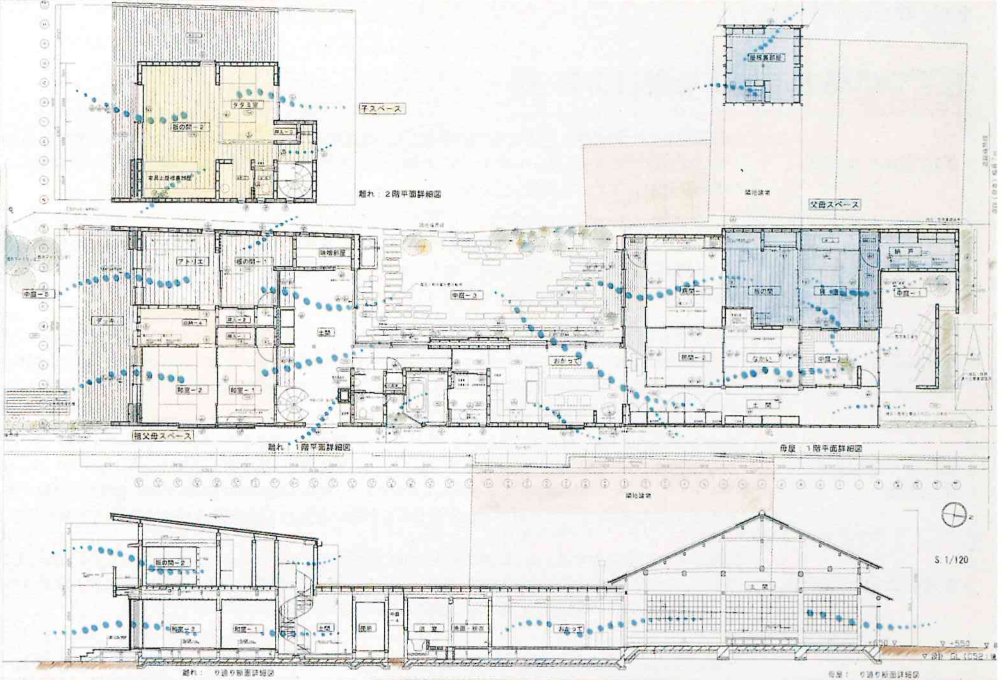
古い町屋が持つ「暗さ」も捨てがたい

昔の町屋は、よく「暗いね」といわれます。「明るくしたい」けど、谷崎潤一郎の陰翳礼讃ではありませんが、「暗さ、薄明かり」も評価したい。すべてを均一に明るくしないようにしました。

住み継ぐ家　～７つの理念～

もともと“７つの理念”を兼ね備えていました。

ただ、しばらくの間、みんなの価値観が少し違う方向を見ていたのではないでしょうか。



離れ　2階平面詳細図

離れ　1階平面詳細図

母屋　1階平面詳細図

離れ　り通り断面詳細図

母屋　り通り断面詳細図

■主なデータ

家族構成／　祖父母夫婦＋父母夫婦＋子供２人（長男来年結婚予定）

構造

主体構造・工法／　木造　基礎／　べた基礎

外部仕上げ

屋根／　和瓦（引っ掛け桟瓦）　カラーステンレスt=0.4瓦棒（小屋裏通気工法）

外壁／　ラスモルタル下地色モルタル（外壁通気工法）
土壁＋ケイカル板t=7下地　下見板t=12木材保護着色塗料

開口部／　木製建具（障子＋硝子戸（おかって部分はペアアルミサッシ

内部仕上げ

修繕部分

床／　畳t=60　杉板t=30　オイルフィニッシュ　土間：色モルタル

壁／　耐震壁：ラスボードt=9.5＋色漆喰（3既存壁：下地調整材＋色漆喰（葉入り）

天井／　杉板棹縁天井（棹は既存材再利用）

増築部分

床／　畳t=60　杉板t=30　オイルフィニッシュ　土間：色モルタル

壁／　ラスボードt=9.5＋色漆喰（葉入り）

天井／　PBt=9＋EP

設備システム

空調　暖房方式／薪ストーブ、掘りこたつ（炭）

給排水　給水方式／上水道直結　排水方式／合併浄化槽　給湯方式／ガス給湯器

離れ2階の子世帯のスペース、左にロフト、右にテラス。

2階テラスから、山並みを見る。